

学徒出陣の思い出

岩井忠熊

“故郷を護る” 思いの兵隊

私は学徒出陣に出会った一人で、当時京都帝国大学文学部の学生でした。

その頃は既に戦争が負けこんでいて、文学部というような戦争の役に立たないところで学問している者は、いずれは兵隊にとられると思っておりましたから、徴集猶予停止でこれから軍隊へ行けといわれた時、あまり意外には思いませんでした。しかし、本当のところを言いますと軍隊は好きではありませんでした。好きでなかったから軍隊の学校には行かなかったわけですが、私と同じ年齢の人で、当時の大学や高等学校、専門学校などに行かなかった人たちはほとんどん兵隊に行って死んでいるわけです。

そんななかで、学生だけが特権的に徴集猶予されて、軍隊に行かないでいることに大変後ろめたい気持ちを持っていたことは事実です。だから、軍隊に行けと言われたら行かねばならないと思っていました。その当時我々はどういう風に考えていたかといいますと、『月光の夏』の映画にも出てきましたが、故郷（ふる

さと)という言葉があります、私達が兵隊に行くと言うことは故郷を護ることであり、その中には自分の家族とか友人とかあるいは恋人とか、そういう人達を護るために行くんだ、それが国のために働くということだ、という風に考えていたわけです。

つまり、私達に兵隊に行けと言ったのは国家であり、それを迎え入れたのは陸海軍であったのですが、国家とは何かというようなことはあまり考えませんでした。それはあの当時の学生の思想の弱点だと思います。そういうことは考えないで、国というのは国家というよりも自分達の知ってる身内の人たちであり、"さらば故郷"という歌のあの"故郷"というイメージです。これを護ることはやはりしなければいけないのではないか、そのためには兵隊に行かなければならないのだ、と自分に言い聞かせて軍隊に入ったというのが本当のところですよ。

学生は軍隊で役に立つ

その当時の状況からいいますと、やはり学生というのは軍隊に入れたら一番早く役に立つ人間だったので。といいますのは、学校を出てきた者は旧制中学校の一年生から軍事教練を受けているわけです。私の場合でいうと、中学校・高等学校・大学と軍事教練を受けてきましたから、鉄砲や軽機関銃の扱いについて、撃つことはもちろんのこと、銃器を分解して掃除をすること、さらに、尖兵小隊はどういう行動をするものだとか、夜襲の時にはこのようにするのだといって泥棒みたいに音を立てずに歩く訓練などをさせられたりしましたので、一通りの軍事知識があるのです。

このような学生は、軍隊に入れて数か月間教育したらたちまち役に立つということを見込まれて、あの一

九四三（昭和一八）年の時点で一斉に入隊させられたのだということになります。

特に飛行機の搭乗員の養成というのは非常に難しいのです。アメリカの青年は若い時から、自動車を下駄のように使っているが、農村で鋤か鍬しか使ったことのないような日本の青年を飛行機乗りにするというのは非常に難しい。ところが、学生は飛行機というものの構造や性能を説明して、動かし方を納得させると理解が早い。さらに、学生にはラグビーだとかサッカーだとか野球などの近代スポーツをやった者がいる。こういう運動神経を訓練した人間は飛行機乗りには非常に適している。そこを狙われて、あの時期に大量に軍隊に入れられたというのが本当のところだと思います。

「修正」で軍人に

私達は、今の若い諸君達からなせ唯々諾々として兵隊なんかに行つたんだ、とよく言われるんですけど、当時はあの戦争というものに、私達は疑問を持っていなかった。今考えてみると恥いるばかりですが、あの戦争というものは、考えてみるとまさに日本の侵略戦争なんです。

日本の国土に敵が入ってきたのではないのであって、日本の軍隊が海外に出て行って侵略した戦争なのです。そのことについて、あまり深刻に思いをいたさずに、先程言ったように、国を護るためには止むをえない、故郷を護るためには止むをえない、家族や知り合いを守るためには止むをえないと思って私達は軍隊に入りました。

軍隊に入ったところが、教練で軍事知識は一応持っていたものの、軍人として教育されたのではないから、おまえ達は個人主義的で自由主義的であり、軍人精神が入っていないということで、徹底的にたたき直され

ました。私達が入った海軍では殴ることを「修正」というのです。その「修正」を何百回もやられたんですけど、数えることができないほど殴られました。

自分がとんまなことをして殴られると連帯責任で、ほかの仲間も全部殴られるので、ほかの人に迷惑をかけないようにというので、文句の出ないように行動することになる。そうしているあいだに、いつの間にか注文通りの海軍軍人・海軍士官に仕立て上げられてしまうわけです。その果てに当時の特攻要員に志願したんです。

海軍の戯れ歌に「人の嫌がる軍隊に志願するような馬鹿もある」というのがありました。これは徴兵で入った兵隊さんが、海軍兵学校とか機関学校を卒業した士官、あるいは殆ど志願兵出身で成り立っていた下士官、準士官、特務士官に毎日厳しくしぼられるものですから、それを怨んでつくった歌なんです。「人の嫌がる軍隊に志願するような馬鹿」というわけです。特攻隊まで志願することは「馬鹿のなかの馬鹿」ということになる。しかし、その特攻隊志願が学徒兵のなから沢山出て、そして『月光の夏』の映画で見つたような運命を辿った人が多勢いたんです。

私は生涯に涉って忘れない心の傷みみたいなのとして、これからも生きていかなばならない。そのために、生きているうちには何かしなければいけないと絶えず思っている次第です。

なぜ特攻隊に

いま、立命館の国際平和ミュージアムで「戦争・大学そして学生」の学徒出陣五〇年の展示をやっています。あそこへ入った正面に和田稔君という人の日記が展示されていますが、あれは私が遺族にお願いして展

示させてもらったものです。その日記は『わだつみのこえ消えることなく』（筑摩書房のち角川文庫）として刊行されています。和田君という人は、最後は別の特攻兵器に乗りましたけれど、私が海軍航海学校というところにおりまして、そこから特攻要員に選抜されて送り込まれる時に一緒だった人です。彼は、一度はいわゆる人間魚雷「回天」の搭乗員になって潜水艦に乗って出撃したのですが、その時は敵に巡り合うことなく帰ってきて、二度目の出撃の直前で、終戦の年の七月になります。訓練中に事故で死んだ人です。この人は昔の第一高等学校から東京帝国大学の法学部に入った、いわば典型的なエリートコースを歩んだ人ですが、私が今までにつきあった友人のなかでも一・二というほど抜群に頭のいい人でした。ああいう有能な人間が一体なぜああいう死に方をしたんだろうということを私も考えます。

なぜ特攻隊などを志願したのか、その動機は人によって様々だろうと思います。和田君もそうでしたけれど、私も航海学校というところにおりまして、これは航海士を養成する学校です。航海士というのは船の艦橋でブリッジというところで勤務するのですが、ここは非常に危険な所なんです。軍艦というものはアーマーという厚い装甲で覆われていて、弾がなかなか貫通しないようにできています。ところが、艦長とか司令官、航海長、航海士というような人が勤務する艦橋というところは、船を動かすところですから、全部見渡せなければいけないので、ほとんど青天井です。船の中核ですから敵の攻撃はそこを目標にします。先ずそこを破壊しようとはまずから殆ど生き残れないのです。

どうせ、航海士になっても死ぬのだから、同じ死ぬのならば確実に敵に打撃を与えて死んだほうが、まだましだろうという気持ちの一つです。

もう一つは客観的な条件になるのですが、私は一〇人兄弟の一〇人目にして、その当時はまだ特攻隊の存在が最高の軍事機密ですので、公表されておりませんでしたけれど、特攻要員については、一人っ子とか長男は除外されていたんです。そのなかで私なんかはどう見てもおあつらえ向きの特攻要員ということになるものですから、このまま特攻隊にいかないで済むとはとても思えなかった。何れは行かねばならないのなら先に行ってしまうおうという気持ちで行ったというのが本当のところですよ。

特攻隊兵員の葛藤

ただ、和田君なんかの日記を見てもそうなのですが、非常に繊細な人で葛藤を抱えているのです。『きけわだつみの声』なんかを見るとそういう文書が沢山ありますが、みんなものすごい葛藤を抱えて死んでいったのだということだけは言っておきたい。

なかには非常に単純に「天皇陛下のために悠久の大義に生きて」とかいう遺書を残した人もいます。しかし、陸軍士官学校などでは遺書の書き方まで指導しているのです。だから指導されたままのような遺書を書いて死んでいった人が沢山いるのです。本当のところはどうかというと、これはものすごく葛藤を抱えるわけですよ。

最後の頃、私達が酒を飲んで唱った歌を紹介しますと「男なら男ならなれよアジアの海賊馬賊 インド 豪洲シベリア蒙古 男多恨の血は躍る」なんていう歌がある。私は生まれてから一回も海賊や馬賊になろうと思ったことはありません。でもそんな歌を唱うというのは、もういよいよ死ぬんだから自棄なんです。私は特攻隊の基地まで進出し、発進を用意するところまでいきましたけれど、特攻隊員として発進したことは

ありません。しかし、出撃を命じられる前というのは、荒れるんです。

これは私が見聞し、何遍か経験したことです。出撃する直前になったら、司令とか副長とかいうのが出てきて「すきやき」かなんかで一杯飲ましてくれるわけですが、彼らは酒を注いでさっさと姿を消すのです。というのは、それから後が危ないからです。特攻隊に酒を飲ませて酔っぱらわせたなら、みんな軍刀を持っていきますからあとは何が起こるかかわからない。酒くせの悪いのは「あの司令、副長をたたき斬ってやる」というようなことを言っておかれるというようなことがしばしば起こった。これが実態なんです。「人間魚雷」にいた友人が実際に言っていることなんです。はっきりいえばこれは怖いものなんです。魚雷というのは本来発射するもので、人間が乗るものではないんです。一回だけそれを体験するというのは無茶なんです。参謀肩章をつけた偉い人は、自分で乗ったことはいませんが、一回だけそれを体験するというので中佐か大佐が「人間魚雷」に乗ったところ、平常威張っている参謀肩章をさげたその人物はズボンの前を濡らしたという、それほど怖いもので、隊員はその怖さに耐えていったわけです。

戦争責任

ところが、今でも海上自衛隊の基地があり、昔海軍兵学校があった江田島に記念館があり、そこに旧特攻隊で死んだ人達の写真が飾ってあるそうです。そこに、自分は搭乗しないで、おまえは搭乗せよとかんとか命令した連中の写真が飾ってあるんです。私の友人で昔特攻隊に関係した人たちの中には、今は日本でも有名な大企業の幹部になった人もいますが、それを見てカッカと怒っています。おれたちを死ぬような目にあわせたあの連中の写真をあんなところに飾る理由があるのかと行って今でも本気で怒っています。

いまつくづく思うことは、あの死んだ友人達をもっと生かしておきたかった。あの頭のいい和田君なんかは生きていたら何かやったに違いない人なのに、なぜあんなことのために死なせてしまったのだろうかということを本当に残念に思います。

「犬死」とさせないために

日本遺族会とかいうところが、細川首相が“あの戦争は侵略戦争だ”と言ったらそれに抗議していますが、もってのほかだと思えます。つまりそこでの問題は、あの人たちの死というものは客観的に見たら犬死にであつたということです。私自身、東シナ海で自分の乗った船が撃沈されて三時間あまり泳いで助かつたのですが、その時七分の一の人しか助かつていないのです。私が生き残っているのは全くの偶然で、一度そこで死んでいるんです。一度は犬死にして、そこから二度目の生が始まって、私はあの時代に自分のしたことを清算しようと思つて生きています。そういう立場からいうと、あの死んだ人たちを「犬死」にするかしないかという問題には、今生きている人間があの人たちの死から何を学んでこれからどういう世界をつくっていくのかという責任がかかっているのです。私達のこれから生きていく意義というのはまさにそれを実現することにこそあると考えています。同じ釜の飯を喰つて共に苦労した友人の死を心情的には「犬死」とか「無駄死」とか言いたくはありません。心情的には言いたくないのですが、残念ながらあれは「犬死」なんです。ただそれを「犬死」たらしめないように今後我々が生きていくということによってしか、あの人たちの死を償うことはできないと思つています。